

## 奥村土牛 —山崎種二が愛した日本画の巨匠 第2弾

山種美術館（東京・広尾） 2021. 11. 13～2022. 01. 23



本展は、当美術館「開館 55 周年記念特別展」として開催され、当館の創立者「山崎種二」は、「**絵は人柄である**」という信念で、巨匠「奥村土牛」の代表作「135点」に及ぶ屈指の収集品を有することで知られる。

「山種美術館」は、証券会社「山種証券」（現 SMBC 日興証券）と創業者が収集した数百点に及ぶ美術コレクションを展開する、国内初の「日本画専門常設展示施設」である。

「奥村土牛」（オクムラドギユウ）（1889～1990）は、現代の日本画家の一人で、刷毛で胡粉などを 100～200 回も塗り重ねて、非常に微妙な色加減に成功した作品を制作していることが特徴である。

### <本展の見どころ>

1. 「山崎種二」との親交から築かれた「土牛収集品」より代表作を大公開。
2. 当館が所蔵する「院展」への出品作すべて「35 点」を展示。
3. 画伯の人間性が表れた温かな人柄が感じられる作品が心を癒してくれる。

《醍醐》（ダイゴ）1972 年 紙本・額（一面）再興第 57 回院展出品 上図  
京都・醍醐寺三宝院の「しだれ桜」を描いた作品で、10 年程前に訪れた際に土堀の極美を感じ、何時か制作したいと考えたという。そして桜の咲く時期に同寺を訪れて、2、3 日通って満開の桜を夕暮れまで写生したという。

独特の美しい発色のピンク色の桜が、春らしい雰囲気醸しだしている。

《枇杷と少女》1930 年 絹・本 彩色 額一面 再興第 17 回院展出品



色づきかけた枇杷の実をつけた濃い緑の木の下に、幼い少女がたたずんでいる作品で、実力が認められ「日本美術同人」に推挙されるきっかけとなった作品である。

画伯は、柿、ザクロ、栗など数多くの果実の静物画を手掛けているが、果樹と人物を一緒に描いた作品は珍しいとされ、立体的に描き込まれた枇杷の実や葉と、簡素な線と抑制された色彩で描かれた少女の姿の対比も面白い構図である。